富良野避難 活動終える

倉本聰さん

原発事故、希望の親子

避難希望者の受け入れを終えるに当たり活動への思いを語る倉本さん＝8日、北海道富良野市

脚本家倉本聰さん(90)が東京電力福島第1原発事故により避難を希望する親子を活動拠点の北海道富良野市に受け入れてきた活動が、最後に残っていた子どもが大学進学で同市から巣立つことに伴い、その役割を終える。14年間で受け入れた子どもは19人に上り、全国から寄せられた寄付金などで成長を支えた。

【20、21面に関連記事】

倉本さんは8日、富良野市で福島民友新聞社の取材に応じ「避難の支援のきっかけは、戦争中の自身の学童疎開。悲惨なもので大変でもあったが、自分はそこが『第二の古里』になった。(避難した子どもたちにとっても)古里が広がっていくというのは悪いことではない。親戚のように守ってくれる人が増えるということだ」と話した。

被災直後の姿、今も脳裏に

「(被災地は)だいぶきれいになっているが、思い出すのはやはり事故直後のこと」と語る倉本さん

倉本さん、本県に思い

脚本家倉本聰さん(90)は、東日本大震災と東京電力福島第1原発事故後、浜通りを繰り返し訪れ、被災者の話を聞き、富岡町の夜ノ森の桜の点描画を数多く製作するなど、本県に思いを寄せてきた。「(被災地は)だいぶきれいになっているが、思い出すのはやはり事故直後のこと。田んぼに残されたままの車や、色濃く実っているのに、取られないままとなっている柿などを覚えている」という。

毎年繰り返し訪れた夜ノ森では、東電社員などが建てたとみられる家屋の印象が強い。「家を建てるというのはたぶん一生に1度のこと。たぶんそこで子どもができたのだと思う。乳母車や遊具が残っていた。それが全部(事故によって)だめになった。東電の社員もかわいそう、全部がかわいそうに感じた。福島県の人はみな被害者。日本原水爆被害者団体協議会(被団協)がまとまって米国を相手にしようとしたように、被災者もまとまって国に意見を言っていってもいいのではないか」

原発事故に限らず原発政策の行く末は、倉本さんが心配する課題の一つだ。原発から出る高レベル放射性廃棄物の最終処分地の選定が難航していることについては「処分を行うのを前提とした町をつくるなど、よほど大胆な考えをしなければうまくいかないのではないか」と話す。「日本人が日本人であることを見失っていると思う。(原発を)造って、電気で日常生活を成り立たせてきたのに、反対するだけというのはおかしい気がする。どこかで大手術をしないといけない」

くらもと・そう　東京都出身。東京大文学部美学科卒。1963年にニッポン放送を退社し、脚本家として独立。77年に北海道富良野市に移住し、代表作「北の国から」をはじめ、「前略おふくろ様」「優しい時間」「やすらぎの郷(さと)」などテレビ、映画で話題作を生み続けてきた。舞台でも「ノクターン―夜想曲」「走る」など多数の脚本、演出を手がける。

▲ 3月9日 福島民友新聞掲載